

読書と豊かな人間性における民話の意味

—西郷竹彦の「生きる力」から読みひらく—

坂 下 直 子

はじめに

司書教諭の養成科目の中で、「読書と豊かな人間性」について、「読書」することと、「豊かな人間性」を備えることの関係性は、これまでも着目されてきた。特に「豊かな人間性」という概念の定義づけは、その抽象性から、多様な解釈を認めるものである。また、「読書」と「人間性」の関係についても同様である。筆者も、担当する講義の中で、図書資料を読むことによって児童・生徒の豊かな人間性を構築するということの意味に関して、一定の見解を有してはいるものの、明確に定義するまでには至っていない。

文部科学省は、次期学習指導要領に関する論点整理から審議まとめを経て、学習指導要領改訂に進む過程で、中央教育審議会から、2016年12月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を通知した。その中で児童・生徒の豊かな人間性に触れた箇所は次のとおりである¹⁾。

「社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となっており、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。このような時代だからこそ、子供たちは、変化を前向きに受け止め、社会や人生を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことが期待される」「いかに進化した人工知能でも、それが行っているのは与えら

れた目的の中での処理であるが、人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる。このために必要な力を成長の中で育てているのが、人間の学習である」「子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」。

また、いわゆる「生きる力」の理念の具体化をあげ、「変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」を、育てたい具体像として示した。

本稿では、「読書と豊かな人間性」の講義中で、学校図書館資料として紹介されている民話に着目し、民話を読書することと、豊かな人間性との関係を考察するという試みを行う。学校教育における読書材は、楽しみのためのものに限定されない、教育的な一面という意味づけが要求されるのではないだろうか。では、豊かな人間性を育むことと関係して、民話を視野に入れると、どのような教育的解釈が可能であるのかについてを考究すること

は意味のあることだと考えられる。そして、これまでの「読書と豊かな人間性」において民話をどのように評価してきたのかを探り、場合によってはその評価を変革する必要があるだろう。

民話は、『日本国語大辞典』において、「民間に伝承された説話。伝説・昔話など。民譚」²⁾と定義されている。また、『子どもの本と読書の事典』には、「農民をはじめ庶民一般が暮らしのなかで口づたえに語りついできている民間説話（口承文芸）である」³⁾と記されている。さらに、『最新図書館用語大辞典』では、「民間説話の略としての意味に使われている。柳田国男は口承説話を『昔話』と表現している」⁴⁾とある。

民話についての先行研究は、「地理・歴史的方法、語り口の様式的研究、構造的分析、民俗学的研究、民族宗教学的的研究、文化人類学的研究、深層心理学的分析などが行われている」⁵⁾ 他、民話の文学性についてや、地域性についてなど、多岐にわたっているが、その中で司書教諭を養成することを目的とした科目「読書と豊かな人間性」との関係に触れたものは、見当たらない。民話を読むことと「豊かな人間性」を結びつけて論じたものは、管見の限り存在しない。

そこで、本稿では、多数存在する民話の中から西郷竹彦の創作した4つの作品『さるかにがっせん』『かもとりごんべえ』『わらしべちょうじゃ』『兵六ものがたり』をとりあげ、従来の民話との比較を試みる。西郷の民話に焦点を当てる理由としては、西郷が文芸学の構築者であることや、それらの作品で提唱した虚構論や視点論が「豊かな人間性」を考察する上で有用なものであると筆者が仮定し、それらを分析することで、今後の「読書と豊

かな人間性」における民話の位置づけに示唆を得られるのではないかと考えたためである。

一方で、先述のように、学校教育の中で国語科を中心として、教科内での教材として民話（教科書上では「昔話」と表記されていることが多い）が扱われてきた事実が存在する。竹内常一は、2000年前後の「国語」教室の実態をふまえて、「真実を語ることばと真実をおおい隠すことばのちがいは、子どもにも教師にも意識化されることがない。だからまた、子どもも教師も、ミクロ・ポリティクスの世界を綾なす虚実のことばを読み解くことも、またその奥底に深く秘められている沈黙のことばを読みひらいていくこともできない。そのために、子どもと教師、子どもと子どもは、ことばをつうじて自分たちが生きているリアリティを構築していくことができないだけでなく、人間としての主体性を奪還することもできないでいる」⁶⁾と主張した。「人間としての主体性」つまり「生きる力」に着目すると、教科内での学習という点での民話との比較によって、共通点と相違点を見ることも重要であろう。以上の2つの比較観点を持ちながら、民話を検討する。

1. 昔話期と読書の平板化

公共図書館の児童サービスの担当者養成のためのテキストには、民話の中のひとつのジャンルとして「昔話」について多くのページが割かれ解説されている。子どものために昔話を選ぶ際には、心理学と文芸学の立場を理解しておく必要があるとし、そのうち心理学の立場の解説として次のように示した。『さんびきのこぶた』について、「子どもは、この話を聞いているあいだじゅう、つぎつぎに、主人公たちのどの一人かと自分を同一視

するようにしむけられ、その結果、希望を与えられるだけでなく、もっとりこうになれば、もっと強い敵にも勝てるということを教えられる⁷⁾ という心理学の観点が記されている。また、文芸学の立場の解説として、リュティ(M.Luthi)の「一次元性」「平面性」「抽象の様式」「孤立性」「含世界性」理論をあげて、その文学的特徴を明らかにした。

阪本一郎は、1949年、論文「興味とその発達」⁸⁾で、当時の子どもたちの読書傾向を分析した。そして、「昔話期」を4歳から6歳だと断定した。それは、身近な大人が子どもにむかって口伝えに語って聞かせるという口承文学の特徴が、いまだ維持されていた時代のことであった。

時代はくんだり、2012年に野口武悟によって読書傾向の調査が行われ、児童・生徒の読書の対象となる読書材の種類が、著しく平板化していることが明らかになった⁹⁾。阪本の分類では存在していた「昔話期」が存在しなく

なっている。核家族化が進行し、語り聞かせる大人の存在が希薄になったことも一因であろう。つまり、現代の子どもたちにとって民話は、読まれることが減少した読書材と言える。

2. 民主主義教育と民話

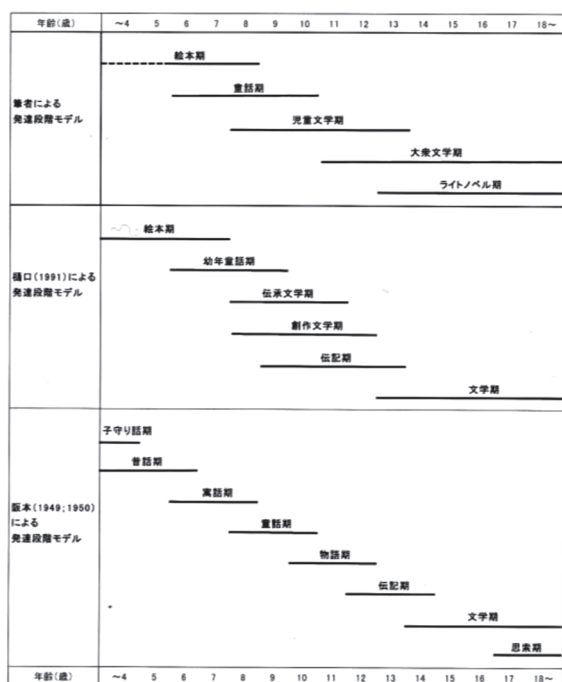
民話について様々な研究がなされてきた中で、大川悦生の論考は、興味深い。大川は民話について「庶民一般が暮らしのなかで口づたえに語りついできている民間説話（口承文芸）である」¹¹⁾と定義した上で、「民話本来の発想は、つねに下から上へであって、上に立つ者から下へではない。……民衆の本音や願望をありのままに反映して」¹²⁾いと分析した。

そして、「明治以来の近代化のかげで、民衆の伝承文化がおしなべて片隅へ追いやられてきたこと、上からの力で自由にものを考える芽をつみとられたことと無関係ではなかった。埋もれかけた民話や伝承文化へ新しい時代の目を注ぎ、いわゆる〈民話の発見〉が試みられたのは、敗戦によって民主主義がもたらされてからであった」¹³⁾と、民主主義における自発的で自由な思考の保障という観点が、民話には備わっていたことを明らかにしている。

先に述べた現代の子どもたちの読書の平板化を、民主主義教育という視点で捉えなおした場合、民話を読むことを再考する必要があるのではないだろうか。そのことは、文部科学省のめざす「生きる力」と親和性の高いものであると言える。

3. 西郷竹彦の4つの民話

西郷竹彦は、1920年に鹿児島県に生まれ、東京大学応用物理学科を卒業し、敗戦後ソビエトに入学し、東洋大学日本学部において日



読書興味の発達段階モデル¹⁰⁾

本文化論を講義した。帰国後、ソビエト文学および児童文学の翻訳に取り組み、小学校の教科書教材に採用された『おおきなかぶ』や『とびこめ』などを翻訳した。一方で、日本の民話についても研究を深め、自ら民話を書き著した¹⁴⁾。文芸教育研究協議会の会長として全国にその理論的影響を与えている。

西郷の理論体系は、虚構論、視点論、形象相関論、構造論、人物論、表現論、象徴論、典型論、などによって構成されている。また、いわゆる「冬景色」論争、「出口」論争、「法則化」批判といったように、文芸研究の分野では極めて独創的な固有の理念を持つ人物でもある。樋口太郎によれば、西郷は、民話を含む文学作品などの「虚構の本質を『現実そのものより高次の「現実」(真実)を創造する』ものと定義し、文学という虚構の世界を体験することでより本質的な現実の認識を得ることができる」¹⁵⁾としたと分析されている。

本稿で民話と人間性の関係を探る上で、西郷の理論に光を当ててみると、そのいずれもが彼の創作した民話において見て取れる。というのも、民話というものの持つ性格上、原典は存在せず、その大まかな筋立てさえ掴んでいれば、作者はいかようにも創作できるからである。それでは以下で、西郷の創作した4点の民話を見ていく。

3. 1 『さるかにばなし』

いわゆる『さるかに合戦』とも呼ばれる作品である。この民話には、これまでに1つの論点が存在した。それは、木下順二・作の『かにむかし』(1959年、岩波書店)と波多野勤子・作の『さるとかに』(1968年、小学館)の問題である。木下が、子がにたちの仇討ちを生き生きと力強く表現したのに対し、波多

野は「伝承では、かにはさるの投げたかきで死んでしまいますが、それではあまり残酷です。ので、けがをすることにしました」とあり、この配慮の是非が問われたものである。「『かにむかし』は日本の民話絵本のありかたを変えさせる大きなきっかけとなった記念碑的な作品だった」¹⁶⁾と、大川によって論じられている。

さて、この民話を、西郷はどのように創作しているだろう。まず、登場人物に対する独自の視点が見受けられる。西郷は、「はたらく貧しい百姓のかにに対しては親しみをこめて『かにどん』とよび、にくいさるに対しては『あかつらのさるのやつめ』とにくにくしげに呼びすてにしました」¹⁷⁾と述べている。また、再話するにあたって同民話を分析し、「この民話のなかでもっともすばらしい場面のひとつは『つぶれたおやがにのこうらの下から、ずぐずぐずぐずぐとたくさんの子がにがうまれて』くるところではないでしょうか。ここにはどんなにおさえつけられ、つぶされても、なお、その足もとからはねかえし立ちあがってくる民衆の不屈なエネルギーが感じられます」¹⁸⁾と評価している。戦前の教科書にある、泣いているばかりの子がにの姿と比較して、違いがあると分析している。西郷は、逆境に負けないうまくましさを描こうとしていた。そして、貧しい親世代とは違って、子がに世代は力を合わせて荒れ地を拓き、準備してさるのところへ向かっていることに、「生きる力」を感じていると言える。

西郷は解説の最後に次のように結んでいる。「『さるかにばなし』には、日本の貧しく、しいたげられた、しかし、明るくたくましく生きぬいてきた民衆のすばらしい姿がきざみこまれています。これは日本民族が世界にほこ

ることのできる民話のひとつです。わたしはありったけの力をそそいでみがきあげてみました。日本の子どもたちの生きる力になってほしいと心から願っています」¹⁹⁾。

3. 2 『かもとりごんべえ』

西郷の視点論が如実にあらわれた作品である。斎藤君子の『かもとりごんべえ』(1985年、ほるぷ出版)と比較してみると、書き出しからすでに、西郷の作品の特異性がきわだっている。斎藤が、「むかし、ごんべえさんというかもとりがいたとさ」と書き出しているのに対して、西郷は、「いまのよに、だれしらぬもののないかもとりごんべえというおとこは、なにをかくそうこのわしのことなのさ」と語りはじめている。

西郷は、「これはかもとりごんべえという人物の物語というよりも、語り手である『わし』の口をかりて、作者である『わたし』の人生哲学、あるいは人生論とでもいったふうなことを語ってみた話と考えていただけたらさいわいです」²⁰⁾と述べ、この作品の持つ複雑さを続けて解説している。単なる運の良い男の話ではなく、「主人公を翻弄する運命の『いたずら』を第三者の『外の目』で物語るというだけでなく、主人公その人が、外から彼をつき動かす『運命』というものに対して、内からどのように対処したか——その内面の真実をも主人公の『内の目』をとおして描きだしてみたいと思ったのです」²¹⁾と主張した。

また、「はじめはただ、状況に流され動かされるだけの人間がやがて自分を動かし、流すその状況に身をまかせながら、しかし状況にのっていきような主体性をいつか生み出しているとでもいった姿を『内』と『外』から

はさみうちにして、とらえ描き出してみたかったのです」²²⁾と続けた。

幼い時に両親と別れ、人生の厳しさと対峙した西郷の姿に重なるように、「状況にしてやられ、ほうり出されてしまうような苦い経験を、いったいわたしはこの半生にいくたび味わったことでしょうか」²³⁾という言葉が読者に語りかけてくる。しかし、西郷の『かもとりごんべえ』はそのあとに「自信」「しかたなさ」「おもしろさ」というキーワードをもって、「これは、『ほら話』ではありますが、人生というものの真実をわたしなりに虚構してみた物語のつもりです」²⁴⁾という、いわゆる彼の虚構論で締めくくられている。この作品もまた「生きる力」という豊かな人間性への架橋となっていると言えよう。

3. 3 『わらしべちょうじゃ』

国文学者の永積安明や、劇作家の木下順二、歴史学者の吉沢和夫の『わらしべちょうじゃ』をあげながら、西郷は「わたしの『わらしべちょうじゃ』」²⁵⁾とわざわざ断って、独自の論考を展開している。

貧しい男の観音信仰という、運のよさがテーマの物語と解釈されがちなこの作品に、西郷は全く違う角度からの解釈を加えている。それは、「いつまでもはなしてはいけない」という観音さまのお告げを破って「手放した」ことからひらけた運、そしてその運は向こうからやってきた「偶然」をこちらからつかまえたからこそ未来が開けていったのではないかという主張である。ころんでも掴んで立ち上がり歩き出す主人公が「どうにもこうにもならん貧乏のなかでもどこか、しおたれていないつらだましいやらくったくない人柄みたいなものを感じる」²⁶⁾と西郷は続けている。

そして、わらしべとみかんを渡したところまでは、相手への思いやりからで、魂胆があったわけではなかったが、馬や屋敷と交換するところでは、主人公は「偶然」に賭けたのだと分析した。貧乏で「どうにもならなくなって神だのみまでしている。それがいまは、こっちから賭けているのです。『てくてく』と彼が歩いていった道は、いわば、彼自身あるきながら、じつは自己変革していった道ではなかったかと思うのです。主体性というのは、初めっから終わりまで、がんこに変わらぬというものではなくて、じつに柔軟にかわるものと考えたほうがよさそうです」²⁷⁾と述べ、主体性という豊かな人間性と結びつく言葉で論を結んでいる。

3. 4 『兵六ものがたり』

西郷は、ふるさと鹿児島为民話にも取り組んでいる。先の3作品が「生きる力」ということを内包していたのに対して、この1作は「きつねと思えばきつねに見え、人と思えば、それはそれとしておもしろい。つまりこの世はわからぬものよ、とでもいいたいような話にしたててみました。じつは、この物語にはつぎのような詩句があるのにふかく感ずるところがあったからなのです。

五百年來世上人 見來皆是野狐身

鐘聲不破夜半夢 兵六爭知無意真

まこと、時はうつり、人はかわれど、つらつらこの世をながむれば、すべては夢か現か、見さだめがたい思いをいだかざるをえません」²⁸⁾と、趣を異にしている。しかしながら、無常感とともに豊かな情意の世界がひろがり、豊かな人間性との関連が感じ取れるものである。

3. 5 小 括

以上より、西郷の4つの民話には「生きる力」すなわち自らの頭で考え判断し、自らの手で主体的に人生を切り拓いていく、たくましさという意味での人間性を備えた登場人物が描かれている。民話という作品を通して、虚構論における読者であるところの児童が「伝達の対象ではなく、創造における媒介としての読者」であるならば、児童・生徒は西郷民話を通して、民主主義の理念を読み取り、それによって豊かな人間性を獲得できると言える。このことは、IFLAユネスコ学校図書館宣言における「責任ある市民」の育成という理念と合致している。

4. 教科書における民話の扱い

それでは、国語科の教科書上において、民話の役割はどのように扱われているだろうか。現在出版されている教科書を総覧してみると、読書材として民話を取り上げているものは、下記のとおりであった。

小学校国語教科書に掲載された民話

光村図書	
1年生	おむすびころりん
	まのいいりょうし
2年生	三まいのおふだ
3年生	たのきゅう
	三ねんとうげ
学校図書	
1年生	うみのみずはなぜしょっぱい
2年生	かさこじぞう
3年生	三まいのおふだ
東京書籍	
2年生	かさこじぞう
三省堂	
1年生	いなばの白うさぎ
2年生	かさこじぞう
3年生	ききみずきん

特徴としては、いずれも1～3年生の学習において民話の単元を構成している。学習のめあても1・2年生では「昔話を想像を広げながら楽しんで読む」「これまでに読んだ昔話について、おもしろかったところを発表する」「読み聞かせを聞きながら、昔話を楽しみ、感想を伝え合うことができる」「自分の住む地方の昔話などに興味をもち、学校図書館などで昔話の本を探して読む」だったものが、「昔話の読み聞かせを聞く」「昔話の読み聞かせを聞き、登場人物の行動や場面の移り変わりに注意しながら、場面の様子の想像を広げることができる。」など、発達段階に応じて読み深める「昔話」の学習となっている。この時学校図書館は、所蔵資料を活用した関連（並行）読書を支援する役割が中心となっている。

しかしながら、国語科における民話は、楽しみ読みや聞く力の育成、登場人物の気持ちを考えるといった点にとどまり、民主主義教育における「生きる力」、つまり「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」といった意味での民主主義教育という観点からは、題材選択においても学習のめあてにおいても希薄であると言える。

中学生になると、民話は教材から姿を消し、替わって『枕草子』や『平家物語』といった古典文学が登場する。そこにはもはや言うまでもなく民主主義的「生きる力」「豊かな人間性」という視点は後退し、文学作品を味わうことに力点が置かれていることがわかる。

おわりに

西郷竹彦の創作した民話は、ひとつの教材、読書材の枠を超えて、民話を子どもたちの「生きる力」へと結びつけるという可能性を示した。その意味で、民話を新しい地平に押し上げたものとも言える。自主性を持って、人生を切り拓く力、民主的な生き方などのメッセージを感じ取ることのできる西郷の民話から、教えられることは多い。民話を読むことと、豊かな人間性の接点は確かに存在すると言えよう。司書教諭養成科目「読書と豊かな人間性」において民話を見る時、以上のような視座も存在することが明らかになった。司書教諭は、教科等において民話を活用する場合にも、上記のことをふまえておくことが必要となるだろう。

注

- 1) 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm [2017. 2. 5確認]
- 2) 『日本国語大辞典 第二版⑫』小学館、2001年、p. 884。
- 3) 日本子どもの本研究会編『子どもの本と読書の事典』岩崎書店、1983年、p. 239。
- 4) 『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004年、p. 529。
- 5) 『新版 現代学校教育大事典⑥』ぎょうせい、2002年、p. 222。
- 6) 竹内常一「読むことの教育——高瀬舟、少年の日の思い出」山吹書店、2005年、p. 6。
- 7) 日本図書館協会児童青少年委員会・児童図書館サービス編集委員会編「児童図書館サービス2」日本図書館協会、2011年、pp. 103-104。
- 8) 阪本一郎「興味とその発達」児童研究会編『児童の行動と発達（下）』金子書房、1949年、pp. 89-112。
- 9) 野口武悟「読書興味の発達段階モデルについての再検討」『発達研究：発達科学研究教育センター紀要』26、2012年、pp. 103-120参照。
- 10) 同上書、p. 119より引用。

- 11) 日本子どもの本研究会編、前掲書、p. 239。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 大阪児童文学館編『日本児童文学大事典 第一巻』大日本図書、1993年、p. 309。
- 15) 樋口太郎「西郷竹彦の文学教育理論に関する一考察——『文芸学』との関係に焦点をあてて——」『京都大学大学院教育学研究科紀要』49号、2003年、pp. 233-245。
- 16) 日本子どもの本研究会編、前掲書、p. 239。
- 17) さいごうたけひこ・文 ふくだしょうすけ・絵『さるかにばなし』ポプラ社、1985年。(初版1967年)
- 18) 同上書。
- 19) 同上書。
- 20) さいごうたけひこ・文 せがわやすお・絵『かもとりごんべえ』ポプラ社、1985年。(初版1968年)
- 21) 同上書。
- 22) 同上書。
- 23) 同上書。
- 24) 同上書。
- 25) さいごうたけひこ・文 さとうちゅうりょう・絵『わらしべちょうじゃ』ポプラ社、1989年。(初版1968年)
- 26) 同上書。
- 27) 同上書。
- 28) さいごうたけひこ・文 みたげんじろう・絵『兵六ものがたり』ポプラ社、1986年。(初版1970年)